



羅針盤

大原 國章
Kuniaki Ohara

虎の門病院, Visual Dermatology 編集委員長



インドネシアにて。

「メラノーマのすべて」執筆にあたって

本誌で悪性黒色腫を取り上げるのは、創刊号以来12年ぶりになります。創刊号では、検査、診断、治療、病理などさまざまな観点から、多数の執筆者に原稿をお願いしましたが、今回は私(大原)の自験例のなかから、臨床像に的を絞って症例を提示します。

どんな疾患にも、教科書的な記載通りの典型例もあればさまざまな亜型や診断に迷う非典型例もあり、また、疾患概念や分類、診断法も時代によって変遷・進歩します。悪性黒色腫もその例外ではありません。

臨床病型に関しては、従来から臨床症状、発生部位、病理形態を考慮した4型分類(悪性黒子黒色腫、結節型黒色腫、表在拡大型黒色腫、末端黒子型黒色腫)が用いられてきました。それに対して、どの病型であれ斑状病変(*in situ*)から始まり結節(*invasive*)に進むこと、病理形態も区別しにくい場合があることなどから、無理に病型分けする必然性がないという意見(*unifying concept*)が出された経緯があります。しかし最

近は、病型ごとに遺伝子の発現異常に特徴があることがみいだされ、上記分類が別の観点から再び評価されるようになってきています。

本号では、まず従来の分類にそって代表的な症例を提示し、次に色々な亜型や非典型例を紹介することにしました。掲載症例はすべて自験例ですので、悪性黒色腫の多様な全貌を網羅できたわけではありませんが、日常診療の役に立つ内容に仕上げたつもりです。なお、過去に原著論文として報告した症例も含まれています。

月刊雑誌という制約上、紙数に制限がありますので、今回は臨床像に焦点を絞りましたが、鑑別疾患、病理、手術などについては次回に取り上げる予定です。

ダーモスコピーに関しては、宣伝めきますが、筆者の近著、『大原アトラス1』(学研メディカル秀潤社)を一読いただければ幸いです。



大原アトラス1 ダーモスコピー

大原國章 著

2014年6月 学研メディカル秀潤社刊